

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 2

はじめに

- 自然共生社会アプローチ
in 持続可能な社会の3アプローチ
- 対象: 兵庫県豊岡市
 - 絶滅危惧種コウノトリの野生復帰に成功
 - 人口 83,323人 (2017年8月31日現在, 住民基本台帳人口(外国人含む))
 - 面積 697.55km²

・特別天然記念物・文化財
・大型(翼開長約2メートル)
・肉食(カエル、ドジョウ、ヘビ等を主食)
・水鳥(田んぼ)




第32回 ニッセイ財団 助成研究ワークショップ
「地域から創る社会イノベーションと持続可能な社会(SDGs)」
2018年2月4日(日) 早稲田大学 大隈記念講堂小講堂

早稲田大学 黒川哲志
早稲田大学(院) 岩田優子

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 3

豊岡市の社会イノベーション: 背景

- 日本で最後の野生コウノトリ生息地域
 - 1971年に野外のコウノトリは絶滅
 - コウノトリの野生再導入事業
- 餌場となる湿地の回復と創造へ
 - 水田を湿田へ回帰させる手法(コウノトリ育む農法)と、水田を放棄して湿地にする手法
 - じる田を農地改良事業で乾田化の歴史
 - 冬期湛水などによる再湿田化は、これに逆行。水田の耕作放棄も、辛い⇒ネガティブな事柄の自発的な受容

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 4

豊岡市における自然共生社会の形成

1971(昭和46)	野外コウノトリ絶滅
1985(昭和60)	ロシアよりコウノトリを導入
1989(平成元)	人工繁殖に成功
1992(平成4)	「生物多様性条約」採択(リオサミット) コウノトリ野生復帰計画開始・県から祥雲寺区にコウノトリ野生復帰拠点施設建設を提案
1994(平成6)	拠点施設(郷公園)建設の受入れを地区として決断
1995(平成7)	「生物多様性国家戦略」策定
1996(平成8)	祥雲寺区の有志で「祥雲寺を考える会」結成 「豊岡あいがも稲作研究会」発足
1997(平成9)	「コウノトリのすみ郷づくり研究会」に改名
1998(平成10)	宮城県田尻町で「ふゆみずたんぼ」を利用した実践研究開始 祥雲寺区で農地の有効利用を考えた基盤整備(地盤のかさ上げ)実施
1999(平成11)	「食料・農業・基本法」制定 「コウノトリの郷公園」開園
2001(平成13)	中貝市長就任
2002(平成14)	「自然再生推進法」成立
2003(平成15)	「コウノトリの舞」(市)、「コウノトリの贈り物」(JA)認証制度
2004(平成16)	価格プレミアムをつけた「コウノトリの郷米」販売開始(地元の量販店、インターネット販売) 「農業環境規範」策定
2005(平成17)	コウノトリ野生復帰(第1回放鳥)(9月) 「コウノトリ育む農法」の体系化(命名、要件・定義の決定)
2006(平成18)	コウノトリ育むお米生産部会と県・市・JAの三位一体の普及体制確立
2007(平成19)	「こうのとり育む」を市長名義で商標登録 野外でのコウノトリのヒナ誕生・巣立ち(国内で46年ぶり)

コウノトリの野生復帰(生息環境整備)の必要性
↓
豊岡型環境創造型農業(コウノトリ育む農法)の推進

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 5

コウノトリ農法の開発・普及における社会的受容性と協働ガバナンス

- 環境保全型農法である「コウノトリ育む農法」の開発(技術的受容性)
- 「コウノトリ育むお米」(コウノトリ米)
 - 生き物ブランド米のトップランナーとして成功
 - コウノトリ米農家に金銭的にも利益(市場的受容性)
- 生物多様性条約(1992)以来のエコフレンドリーな産品への追い風(制度的受容性)

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 6

豊岡市の社会イノベーションと社会的受容性の定義

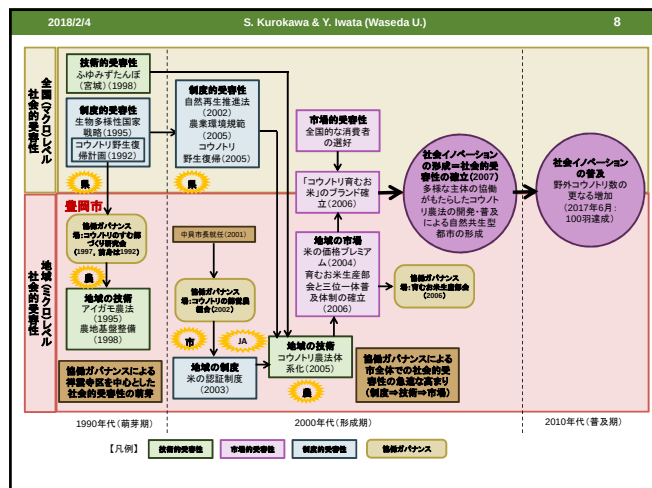
社会イノベーション	多様な主体の協働がもたらしたコウノトリ農法の開発・普及による自然共生型都市の形成
技術的受容性	他地域での環境保全型農業の実践
制度的受容性	生物多様性保全や環境保全型農業の推進政策
市場的受容性	環境配慮農産物への消費者の選好
地域的受容性	地域の技術
	コウノトリ農法の体系化
	地域の制度
	コウノトリ米の認証制度の確立
	地域の市場
	コウノトリ米のブランド確立

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 7

祥雲寺地区から

- 「祥雲寺を考える会」(1996)⇒「コウノトリのすむ郷づくり研究会」(1997)
- 「コウノトリの郷営農組合」(2002)
- 「コウノトリ育むお米生産部会」(2006)

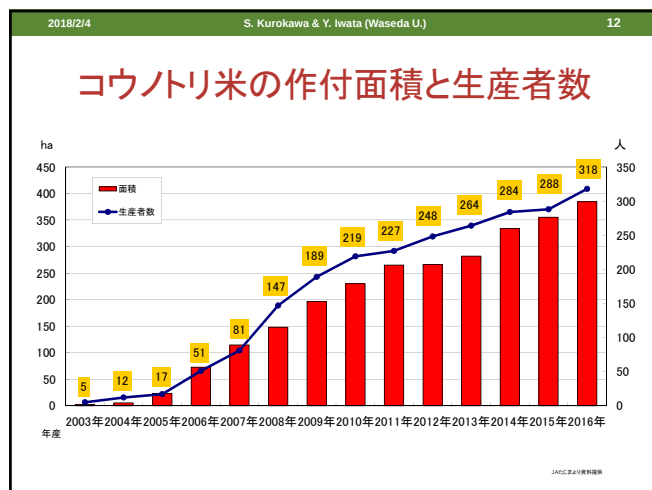
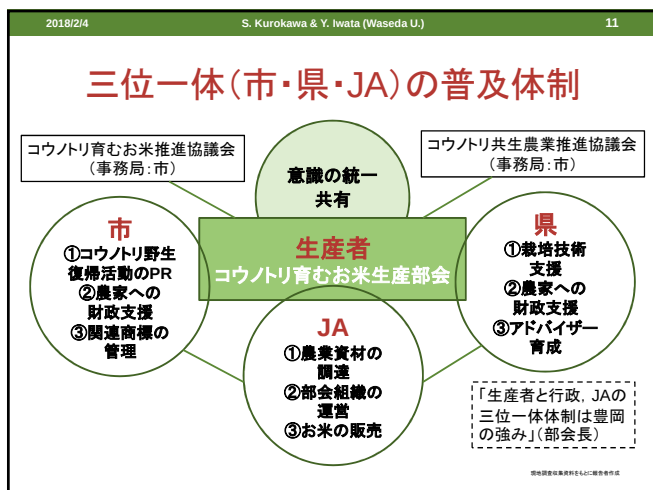
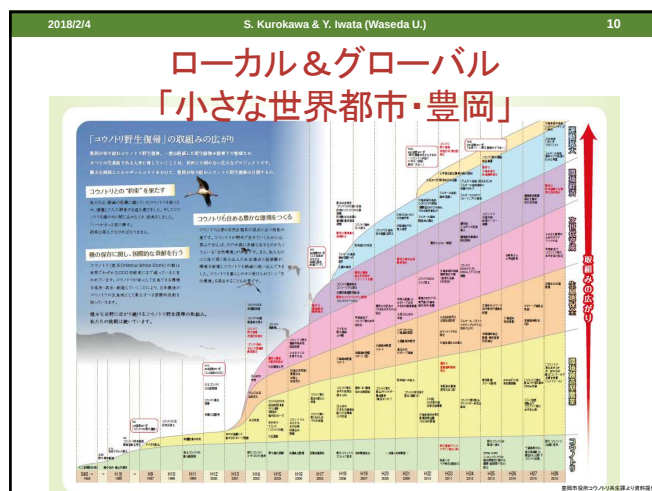
人数	318名(2016年時点)
事業所所在地	兵庫県豊岡市九日市上町550-1(JAたじま内)
品種名	コシヒカリ、五百万石、山田錦、マンゲツモチ
栽培面積	366.1ha(全品種含む)(2016年時点)
栽培地域	豊岡市、朝来市、養父市、香美町



2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 9

成功の要因

- 技術:「コウノトリ農法は全国から集めたさまざまな技術の組み合わせ」
- 制度:直接支払制度の法制化(2015)⇒冬みず田んぼの普及
- 市場:安心安全+食味(消費者のニーズ)
 - 病院での販売(コウノトリ米の無農薬タイプはアレルギーのある人の体にも優しい)
 - 米・食味鑑定コンクール国際大会(日本一の実績も)
- 豊岡の原風景である「農家の女性、但馬牛とコウノトリ」の写真(昭和35年)⇒地域的受容性の基盤
- http://www.iiid.or.jp/ardec/ardec44/ard44_key_note3.html



2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 13

水田の耕作放棄による湿地の創造

- 耕作放棄して湿地転換した3つの水田(戸島湿地, 田結湿地, 加陽湿地)
- 農業経営に不利な条件地の活用(農業者を中心とした地域的受容性)
- 「コウノトリ野生復帰推進計画」(2003)によるコウノトリの餌場のための水田ビオトープ化の公共性承認(制度的受容性)
- 水田所有者への補償(市場的受容性)
- 戸島湿地: 兵庫県「田園自然環境保全整備事業」, 豊岡市「ハチゴロウの戸島湿地整備事業」, 加陽湿地: 国交省「円山川自然再生事業」(技術的受容性)
- コウノトリ湿地ネット(NPO), 案ガールズ(市民ボランティア)

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 14

都市(地域)の個性(特性)と社会イノベーションとの関係(まとめ)

- 「コウノトリという物語があったからやりやすかった」(県民局; コウノトリ野生復帰検証委員会, 2014)
⇒しかし, コウノトリが飛来した他都市では積極的な展開がない(生産部会長への聞き取り)

- 一社会的受容性(必要条件) - 一協働ガバナンス(十分条件)	協働的な社会的受容性 (Collaborative Social Acceptance)
---	---

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 15

今後の課題と展望

- 「環境経済戦略」改訂(2007)から10年
- ① 豊岡型地産地消を進める
- ② 豊岡型環境創造型農業の推進
- ③ コウノトリツーリズムの展開
- ④ 環境経済型企業の集積を進める
- ⑤ 自然エネルギーの利用を進める

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 16

豊岡型地産地消, コウノトリツーリズム, 環境経済型企業, 自然エネルギーの利用

- 自然共生社会の実現から持続可能社会の形成へ
- かばん産業(後継者育成も)
- 地元企業のサポート(事業者認定制度: 65事業者)
- 合併後(1市5町)の各地域の強みを生かした取組み
- 一農家民泊(但東), 観光業(城崎, 出石)





2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 17

- 謝辞: 本報告は, 豊岡市内での2回の現地調査に基づくものである。調査にあたってお世話になりました豊岡市役所コウノトリ共生部の山本様, 沖中様, 環境経済部の谷垣様, 中田様, 但東振興局の由利様, 出石振興局の大岸様, 兵庫県但馬県民局の亀喜様, JAたじまの塩見様, 長瀬様, コウノトリ育むお米生産部会の太原様, 稲葉様, ほかご関係の皆様にお礼申し上げます。
- 付記: 本報告は, 日本生命財団・学際総合研究助成「環境イノベーションの社会的受容性と持続可能な都市の形成」(研究代表者: 早稲田大学・松岡俊二, 2015~2017年)の研究成果の一部である。

2018/2/4 S. Kurokawa & Y. Iwata (Waseda U.) 18

参考文献

Ansell, C., and Gash, A. (2008). Collaborative Governance in Theory and Practice, *Journal of Public and Administration Research and Theory*, 18(4), 543~571.

青山 浩子(2013)協同の力で, 農業と地域を豊かに—コウノトリ育むお米が結ぶ消費者との交流。月刊JA, 59(8), 37~39.

今井 賢一・金子 郁容(1998)ネットワーク組織論。岩波書店, 東京, 272pp.

石垣 尚志(2004)科学技術論争のなかの「原因」と「解決」—「水道水フッ素化」論争における。ソシオロジ, 43(2), 95~110.

伊丹 健之(2005)場の論理とマネジメント。東洋経済新報社, 東京, 411pp.

岩田 優子(2016)協働ガバナンス・アプローチによるコウノトリ米とトキ米の普及プロセスの比較研究。環境情報科学学術研究論文集, No.30, 25~30.

菊地 直樹(2017)「ほっとけない」からの自然再生学—コウノトリ野生復帰の現場。京都大学学術出版会, 東京, 322pp.

岸 康彦(2010)コウノトリと共に生きる農業—兵庫県豊岡市の挑戦。農業研究, No.23, 85~120.

コウノトリの郷舎農組合(2011)コウノトリと共にくらす郷づくり・村づくり・人づくり—コウノトリ育む農法の発展を目指して。パンフレット, 9pp.

コウノトリ野生復帰検証委員会(2014)コウノトリ野生復帰に係る取り組みの広がり分析と評価—コウノトリと共生する地域づくりをすすめる「ひょうご豊岡モデル」, 202pp.

松岡 俊二(2008)国際開発協力における「キャパシティ・ディベロップメントと制度変化」アプローチ。アジア太平洋研究, No.11, 223~237.

西村 いづき(2007)コウノトリ育む農法の意義と将来展望—生き物を育む稲作技術の確立と普及方法。兵庫自治学, No.13, 43~48.

富田 強毅(2013)なぜ順応的管理はうまくいかないのか—自然再生事業における順応的管理の「失敗」から考える。『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』(宮内泰介編), pp.30~47. 新泉社, 東京.

上西 良廣(2014)集落営農における農法導入プロセスに関する一考察—コウノトリ育む農法を事例として。京都大学大学院農学研究科修士論文.

矢部 光保・林 岳(編著)(2015)生物多様性のブランド化戦略。筑波書房, 東京, 197pp.

全国農業協同組合中央会(2013)「コウノトリ育むお米」が結ぶ消費者との交流。月刊JA, 59(8), 36~39.